HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	満洲語現代方言における母音調和
Author(s)	王, 海波
Citation	北方言語研究, 10, 135-156
Issue Date	2020-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/93113
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77601
Type	departmental bulletin paper
File Information	08_135_156.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 10: 135-156（日本北方言語学会 2020）

満洲語現代方言における母音調和

王　海波
（嶺南師範学院）

キーワード：満洲語、三家子方言、黒河方言、シベ方言、母音調和

1. はじめに

1.1. 満洲語の概要

満洲語は満洲・ツングース系の言語であり、元々清国（1616-1912）を建てた満洲族の言語である。満洲語の古典語[1]（以下「満洲古典語」または「古典語」）は 17 世紀から 18 世紀末にかけて清国で使用された満洲語を指す。本稿で扱う満洲語三家子方言と黒河方言[2]は、現在中国黒龍江省チチハル市富裕県三家子屯と同省黒河市で話される満洲語の方言である。また、本稿で扱う満洲語シベ方言[3]は、現在中国新疆ウイグル自治区のチャプチャルシベ自治県で話される満洲語の方言である。

1.2. 本稿の目的

拙論王海波（2011）では、満洲語三家子方言における母音調和の存在について考察した結果、三家子方言のいわゆる母音調和は、「母音調和のスコープは形態的単位」という母音調和の必須条件を満たさないため、典型的な母音調和とはかなり異なるものであるという結論を出した。しかし、満洲語の現代方言には三家子方言のほかに、黒河方言とシベ方言もあるが、王海波（2011）では黒河方言とシベ方言については考察を行なっていない。また、古典語およびそれ以前にあった変種から現代方言まで母音調和がどのような変化を経てきているかについても詳しく論じていない。そこで、本稿では三家子方言のみならず、黒河方言とシベ方言も扱うことにする。また、現代方言に関する共時的記述のほかに、pre-古典語か

---

[1]「文語」と呼ばれることが多いが、文体として口語と対立する意味合いの文語と誤解される可能性があるため、本稿では早田輝洋（2010）と早田清冷（2015）の「満洲古典語」の言い方に従い、「古典語」と呼ぶことにする。本稿の古典語の形式は主に 1795 年に刊行された『五体清文鑑』に従う（具体的な資料は田村ほか 1966-1968 である）が、福田（2008）と胡増益（1994）などを参考にした例もある。本稿の古典語の表記は Möllendorff (1892) が提案したメレンドルフ表記に従うが、次の 4 点において異なる表記をする。(i) 早田輝洋（2003）に従い、古典語の u と ū を同じ音素と見なし、同じ記号（u）を用いる。(ii) 早田輝洋（2003）に従い、古典語の軟口蓋音（k, g, x）と口蓋垂音（q, ɢ, χ）を異なる音素と見なし、異なる記号を用いる。(iii) 早田輝洋（1998: 58-59）に従い、メレンドルフ表記の oo を ou で表記する。(iv) メレンドルフ表記の ng を ŋ で表記する。

[2] 三家子方言には次のような音素と異音があると考えられる。/p/ [pʰ], /b/ [p ~ b], /m/ [m], /f/ [ɸ], /t/ [tʰ], /d/ [t ~ d], /n/ [n ~ ɲ], /s/ [s ~ z ~ ɕ ~ t͡sʰ], /š/ [ʂ ~ ʐ], /c/ [t͡ʂʰ ~ t͡ɕʰ], /j/ [t͡ʂ ~ t͡ɕ ~ d͡ʐ ~ d͡ʑ], /l/ [l ~ ɹ ~ ɭ ~ ɾ], /k/ [kʰ ~ qʰ ~ x ~ χ], /g/ [k ~ ɡ ~ q ~ ɢ], /ŋ/ [ŋ], /x/ [x ~ χ ~ ɣ ~ ʁ], /N/ [ɴ̃ ~ n ~ m ~ ŋ ~ ɴ ~ ɲ], /y/ [j], /w/ [β̞ ~ ʷ], /i/ [i], /u/ [u ~ y], /e/ [ɤ ~ e ~ ɯ ~ ɨ], /a/ [a ~ ɛ], /o/ [ɔ]。黒河方言の音素と異音は三家子方言のものと類似する。ただし、黒河方言の母音音素 /o/ は、[ɔ] の他に [œ] という異音もある。

[3] シベ方言には次のような音素と異音があると考えられる。/p/ [p(ʰ)], /b/ [b ~ p(ʰ)], /m/ [m], /f/ [f], /t/ [t(ʰ)], /d/ [d ~ t(ʰ)], /n/ [n ~ ɲ], /s/ [s ~ z ~ ɕ ~ ʑ], /š/ [ʂ ~ ʐ], /c/ [t͡ʂ(ʰ) ~ t͡ɕ(ʰ) ~ ʂ ~ ɕ], /j/ [d͡ʐ ~ d͡ʑ ~ t͡ʂ(ʰ) ~ t͡ɕ(ʰ) ~ ʂ ~ ɕ], /l/ [l ~ ɹ ~ ɭ], /r/ [ɾ ~ r], /k/ [k(ʰ) ~ q(ʰ)], /g/ [ɡ ~ k(ʰ)], /ŋ/ [ŋ ~ ɴ], /x/ [x ~ ɣ], /q/ [q(ʰ) ~ χ], /ɢ/ [ɢ], /χ/ [χ ~ ʁ], /N/ [ɴ̃ ~ n ~ m ~ ŋ ~ ɴ ~ ɲ], /y/ [j], /w/ [v ~ ʷ ~ ʋ ~ w ~ f], /i/ [i], /u/ [u ~ y], /e/ [ɜ ~ ɤ ~ ɯ ~ ɨ], /a/ [a ~ ɛ], /o/ [ɔ ~ ø ~ œ]。

ら現代方言までの変化についても扱うことにする。

2. 共時的考察

2.1. 母音調和の概念

[1] 母音調和と metaphony の違い

Anderson (1980: 6-13) は母音調和を定義する際、母音調和にしか見られない共通かつ不可欠な特徴を次のように提示している。

(i) 母音調和は母音の音声的動機による同化現象である。

(ii) その同化の範囲は特定の音節数（例えば隣の音節のみ）ではなく、ある形態的単位を範囲とする（unboundedness）。同化の範囲が隣の音節のみである場合は、母音調和ではなく、metaphony である。

[2] 母音調和のグルーピングの種類

Aoki (1968: 142-145) は類型論的視点から母音調和を前舌対後舌（前後）、高対低（高さ）、円唇対非円唇（円唇性）という 3 つの種類に分類している。また、Anderson (1980: 32-41)、亀井ほか（1996: 1263）、Krämer (2003: 5)、Ko (2012) などによれば、咽頭腔の大きさによる母音調和も見られる。

2.2. 共起

本節では、母音調和の有無と分類を考察するために、語根内における母音の共起について考察する。三家子方言と黒河方言とシベ方言における母音の共起の可能性をそれぞれ次の表 1・表 2・表 3 のようにまとめた。

表 1：三家子方言における母音の共起の可能性

後 前	i	u	e	a	o
i	diji- 燃やす	bikuN 寒い	bitke 本	yixaN 牛	
u	uji- 養う	uju 頭	use 種	nyunyaxe 鶯鳥	
e	eyliN 時間	kewule 腹	feskele- 蹴る		
a	ayliN 山	xalxuN 暑い	ame 父	aNba 大きい	
o	dolgi’ 中	omu- 飲む	doxše- 震える	xola- 読む	molo 茶碗

表 2：黒河方言における母音の共起の可能性

後 前	i	u	e	a	o
i	diji- 燃やす	gisuN 言語	bitke 本	cimaxe 明日	
u	uji- 養う	uju 頭	use 種	nyunyaxe 鶯鳥	
e	eyliN 時間	xewule 腹	feskele- 蹴る		
a	ayliN 山	xalxuN 暑い	ame 父	aNba 大きい	
o	dolxi 中	xomu 大便		xola- 読む	molo 茶碗

表 3：シベ方言における母音の共起の可能性

後 前	i	u	e	a	o
i	diji- 燃やす	gisuN 言語	bitke’ 本	niŋnyare 春	
u	uci’ ドア	uju 頭	uneŋe 本当	nyuŋnyaχe 鶯鳥	uso 種
e	eriN 時間	jeku 穀物	erde’ 朝	beda ご飯[4]	
a	aliN 山	χalχuN 暑い	ame’ 父	aNda 友達	χaNdo 稲[5]
o	dyosi- 入る	bowuN 風呂敷	owe- 洗う	loqa 棘[6]	mogo 茸

上記から分かるように、o が後にある場合はもっとも制限が強い。円唇性によるグルーピングを示しているように見える。しかし、円唇母音の u にはこのような制限がないため、円唇性で説明するのは無理と考えられる。すなわち、共起だけに基づいて、母音調和のグルーピングの有無と種類を判断することが難しい。したがって、次では、同化について考察する。

2.3. 同化

本節では、母音調和の有無と分類を考察するために、unspecified な母音を有する完了接辞が付与される場合の同化について考察する。三家子方言とシベ方言では、完了接辞の母音は e と u の間で揺れる。黒河方言では、完了接辞の母音は e と a の間で揺れる。

---

[4] シベ方言の e と a の共起の例は、次のような 3 つの場合がある。(i) [jɪ] の音素設定を ye とする先行研究がある（例えば、Kubo 2008）。この場合、yeja「虻」、yelaN「3」、yelχa「花」、yelχa-「弁別する」、yena「姉妹の子」、yeqta-「積む」、yera「黍」、yeχaN「牛」等のような例がある。(ii) ewa「ここ」と tewa「そこ、あそこ」のような例がある。ewa, tewa の e と a は歴史的にもともと 2 つの形態論的要素に属していたと考えられる。(iii) beda 等のような「唇子音＋e」の場合に、e と a の共起がある。この場合の e は古典語の u から変化したものである（このような例は他にも feta「縄」、meda-「帰る」、medaN「回数」、mersa「大根」等がある）。すなわち、通時的には説明できなくもない場合がある。しかし、共時的な考察において通時的な要素をどの程度まで考慮に入れてよいか問題である。少なく共時的には、シベ方言では e と a の共起は十分可能であるということは否定できないと考えられる。

[5] χaNdo と χaNdu’ の形式が共にあり、中国語の「旱稲」からきた借用語のようである。他に次のような例がある。(i) sawgo「（トランプ等で）インチキするような（人）」。(ii) pyaNko「丸石」。(iii) tyawxo「調味料」（中国語の「調和」からの借用語か）。語頭音節以外に現れる [ɔ] については、久保（1993）に詳しい言及がある。

[6] o と a の例は loqa「棘」、yomcyaqe「決まりの悪い」、bosa「粟の醸造酒」のみである。loqa「棘」はほかに luqa の形式もある。bosa は久保ほか（2011: 24）によると、カザフ語からの借用語である。

[1] 三家子方言

三家子方言では、単音節動詞語幹の母音が非円唇母音である場合、完了接辞の母音も非円唇母音である（1a, 1b, 1c）。単音節動詞語幹の母音が円唇母音である場合、完了接辞の母音も円唇母音である（1d, 1e）。すなわち、単音節動詞語幹につく完了接辞の母音の円唇性は、語幹の母音の円唇性と同様である。

(1a) ta-xe「見た」（見る-完了接辞）
(1b) ji-xe「来た」（来る-完了接辞）
(1c) je-ke「食べた」（食べる-完了接辞）
(1d) bu-xu「与えた」（与える-完了接辞）
(1e) yo-xu「行った」（行く-完了接辞）

複数音節動詞語幹の最後の母音が非円唇母音である場合、完了接辞の母音も非円唇母音である。

(2a) sita-xe「遅れた」（遅れる-完了接辞）
(2b) tili-xe「蒸した」（蒸す-完了接辞）
(2c) uda-xe「買った」（買う-完了接辞）
(2d) suji-xe「走った」（走る-完了接辞）

一方、複数音節動詞語幹の最後の母音が円唇母音である場合、完了接辞の母音はほとんどの場合、円唇母音である（3a, 3b, 3c）。しかし稀に非円唇母音との間で揺れる例もある（3d, 3e）。

(3a) buju-xu「茹でた」（茹でる-完了接辞）
(3b) axdu-xu「信じた」（信じる-完了接辞）
(3c) bisu-xu「撫でた」（撫でる-完了接辞）
(3d) ojyu-xe/-xu「キスした」（キスする-完了接辞）
(3e) tewu-xe/-xu「入れた」（入れる-完了接辞）

上記のような円唇性の同化は、-bu「使役接辞」によって中断される。すなわち、使役接辞が円唇性の同化を引き起こす。具体的には、非円唇母音で終わる動詞語基に -bu がつき、さらに完了接辞がつく場合に、その完了接辞の母音は円唇の u である。例えば、次のような例がある。

(4a) ta-bu-x**u**「見せた」（cf. ta-x**e**「見た」）
(4b) ji-bu-x**u**「来させた」（cf. ji-x**e**「来た」）

また、複数音節語幹で、語幹内の異なる音節の母音の円唇性が異なる場合、完了接辞における母音は、語幹末の母音の円唇性と一致する。すなわち、このような同化の範囲は、隣接する音節に限られるようである。

(5a) axdu-xu「信じた」（信じる-完了接辞）	非円唇	円唇	-	円唇
(5b) bisu-xu「撫でた」（撫でる-完了接辞）	非円唇	円唇	-	円唇
(5c) xola-xe「読んだ」（読む-完了接辞）	円唇	非円唇	-	非円唇
(5d) uji-xe「養った」（養う-完了接辞）	円唇	非円唇	-	非円唇

一方、(5) からは、語幹末の母音が隣接する（接辞の）音節の母音しか同化させないことが分からない。具体的には、語幹末音節の母音が接辞の 2 つめ以降の音節の母音を同化させるか否かが分からない。ただ三家子方言では複数の unspecified な母音を有する接辞がない。しかし、(5) からは、接辞の母音を同化させることができるのは、隣接する（語幹末の）母

音のみであり、その前の母音ではないということがわかる。

[2] 黒河方言

黒河方言では、完了接辞における母音は e または a である。語幹の最後の母音が a の場合、完了接辞における母音は普通、e であるが、稀に a になることもある[7]。

(6a) twa-xe ~ (稀に) twa-xa「見た」（見る-完了接辞）
(6b) wa-xe ~ (稀に) wa-xa「殺した」（殺す-完了接辞）
(6c) uša-xe ~ (稀に) uša-xa「引っ張った」（引っ張る-完了接辞）

語幹の最後の母音が a 以外の母音の場合、完了接辞における母音は e である。

(7a) yo-xe「行った」（行く-完了接辞）
(7b) ji-xe 「来た」（来る-完了接辞）
(7c) je-ke 「食べた」（食べる-完了接辞）
(7d) bu-xe「与えた」（与える-完了接辞）
(7e) wayli-xe「捨てた」（捨てる-完了接辞）

黒河方言と三家子方言が顕著に異なるのは、黒河方言の完了接辞の母音は常に非円唇という点である。黒河方言では、完了接辞の母音が a か e かは、語幹の母音の高さに関係するようであり、高対低（高さ）のグルーピングのようである。

[3] シベ方言

シベ方言では、単音節動詞語幹の母音が非円唇母音である場合、完了接辞の母音も非円唇母音である（8a, 8b, 8c）。また、単音節動詞語幹の母音が円唇母音である場合、完了接辞の母音は円唇母音と非円唇母音のどちらも可能である[8]（8d, 8e）。

(8a) ta-χe=yi「見た」（見る-完了接辞=モダリティ接語[9]）
(8b) ji-xe=yi「来た」（来る-完了接辞=モダリティ接語）
(8c) je-ke=yi「食べた」（食べる-完了接辞=モダリティ接語）
(8d) bu-xu=yi ~ bu-xe=yi「与えた」（与える-完了接辞=モダリティ接語）
(8e) o-χu=yi ~ o-χe=yi「なった」（なる-完了接辞=モダリティ接語）

複数音節語幹で、語幹内の異なる音節の母音の円唇性が異なる場合、完了接辞における母音の円唇性は、語幹末の母音と一致する。

---

[7] 黒河方言では、完了接辞の母音が a として現れる場合は話者が興奮した口調で完了を強調する場合に限る。したがって、ある種のイントネーションの影響による可能性があると考えられる。なお、wa-xa の完了接辞の -xa における x は音声的に [ʁ] である。

[8] 久保ほか（2011: 11）は、o-Xei [oʁʊɪ]「なった」と soŋu-Xei [soŋχʊɪ]「泣いた」の例を挙げて、語幹に円唇母音 o がある場合に、完了接辞の母音 [u ~ ʊ] であると指摘している。一方、筆者の調査では、この場合における完了接辞の母音は円唇母音と非円唇母音のどちらもあり得る。なお、久保ほか（2011）は完了接辞の非円唇母音と円唇母音を異音としてみなしているが、本稿では非円唇母音を持つ完了接辞と円唇母音を持つ完了接辞を異形態としてみなしている。

[9] シベ方言の =yi は一種のモダリティ接語である。詳細は児倉（2018）を参照されたい。=yi は児倉（2018）では =i のような形式である。

(9a) usa-χe=yi「引きずった」（引きずる-完了接辞=モダリティ接語）
(9b) χula-χe=yi「読んだ」（読む-完了接辞=モダリティ接語）

シベ方言は前述した三家子方言と同じように、完了接辞の母音の円唇性の同化の範囲は隣接する音節に限られているようである。

[4] 考察

ここまでに見てきた現象は、母音調和とみるとすると以下のような問題点がある。

(i) 三家子方言の問題点

前述したように、母音調和に不可欠な特徴に関しては Anderson (1980: 11) は unboundedness を挙げた。それによれば、母音調和による共起及び同化の範囲は形態的単位であり、特定の音節数ではない。三家子方言において円唇性の同化の範囲は隣接する音節という音韻的単位なので、母音調和の条件を満たさない。したがって、三家子方言のいわゆる母音調和は、典型的な母音調和とはかなり異なるものと考えられる。典型的な母音調和より、metaphony に近い性質を示している。

(ii) 黒河方言の問題点

語幹が低母音 a の場合、完了接辞の母音は a の他に、e もあり得る。しかも e の方が、頻度が圧倒的に高い。したがって、「母音 a」と「母音 a 以外の母音」という高さのグルーピングはできないと考えられる。

(iii) シベ方言の問題点

シベ方言のいわゆる母音調和には、次のような 2 つの問題点がある。

問題 1：シベ方言は三家子方言と同じように、いわゆる円唇性のグルーピングの範囲は、隣接した音節のみのようである。このようなグルーピングは、母音調和の条件を十分満たさないため、典型的な母音調和とはかなり異なるものと考えられる。典型的な母音調和より、metaphony に近い性質を示している。

問題 2：表 4 に示すように、語幹末の母音が非円唇母音の場合、完了接辞の母音は非円唇であるが、語幹末の母音が円唇母音の場合、完了接辞の母音は円唇と非円唇のどちらも可能である。したがって、非円唇母音と円唇母音のグルーピングはできないと考えられる。

表 4：シベ方言の語幹末の母音の円唇性と完了接辞の母音の円唇性の関係

	接辞の母音＝円唇	接辞の母音＝非円唇
語幹末母音＝円唇	＋	＋
語幹末母音＝非円唇	－	＋

注：「＋」は可能を示す。「－」は不可能を示す。

2.4. まとめ

本節の内容から分かるように、三家子方言と黒河方言とシベ方言のいずれにおいても、語根では異なる種類の母音のグルーピングが見出せない。また、どの方言においても、接辞の同化において母音の性質によるグルーピングのような現象には問題点がある。したがって、典型的な母音調和とはかなり異なる性質を示していると考えられる。

3. 通時的考察

本節では、古典語およびそれ以前にあった変種から現代方言まで母音調和がどのような変化を経てきているかについて考察する。3.1. ではグルーピングの性質について考察し、3.2. では接辞の母音におけるグルーピングの有無の変化について考察する。

3.1. グルーピングの性質

3.1.1. 古典語のグルーピング

本節ではまず、古典語におけるグルーピングをみる。

[1] 共起

Zhang Xi (1996: 44) は古典語の語における母音の共起の可能性を次のようにまとめている。この表から、a/e, ʊ/e, o/e, u/o, ʊ/o が共起しないことが分かる。

表 5：古典語の語における母音の共起の可能性（Zhang Xi 1996: 44 からの引用）

	i	u	e	a	ʊ	o
i	i-i	i-u	i-e	i-a	i-ʊ	i-o
u	u-i	u-u	u-e	u-a	u-ʊ	u-o
e	e-i	e-u	e-e	e-a	e-ʊ	e-o
a	a-i	a-u	a-e	a-a	a-ʊ	a-o
ʊ	ʊ-i	ʊ-u	ʊ-e	ʊ-a	ʊ-ʊ	ʊ-o
o	o-i	o-u	o-e	o-a	o-ʊ	o-o

注：例がないまたは稀の場合は網掛けにした。太い囲みの線は筆者による。

a, o, ʊ と e は共起しないことに基づいて、古典語の母音を次のように、男性・女性・中性に分類する研究が多い（例えば、Ard 1984: 60、季永海ほか 1986: 86）。

(10)　男性＝a, o, ʊ
　　女性＝e
　　中性＝i, u

下記では、いわゆる男性の group を group 1、いわゆる女性の group を group 2 と呼ぶことにする。いわゆる中性の母音の性質については後述する。

[2] 同化

Zhang Xi (1996: 46) は、古典語の接辞の母音が交替する例をまとめている。そのうち、次のような例がある。

(11a) 完了接辞 -χa / -χo / -xe

(11b) 名詞派生接辞[10] -qʊ / -ku

Zhang Xi (1996: 48-50) が指摘しているように、完了接辞などにおける母音 a と e を特定する要素と、名詞接辞などにおける母音 ʊ と u を決定する要素は語幹・語基の母音であり、語幹・語基に group 1 の母音があれば、接辞の母音はそれぞれ a, ʊ であるが、語幹・語基に group 2 の母音があれば、接辞の母音はそれぞれ e, u である。

一方、完了接辞における母音 o の現れる環境条件に関しては、次の [3] を見よう。

[3] a と o の関係について

(i) 複数の音節からなる語幹の場合

o を含む複数音節語幹に完了接辞が後続する場合、完了接辞の母音が a と o の両方の場合がある。例えば、Zhang Xi (1996: 98) は次のような例を挙げている。

(12a) sonjo-χo「選んだ」（選ぶ-完了接辞）

(12b) donji-χa「聞いた」（聞く-完了接辞）

この現象に関しては、Zhang Xi (1996: 100, 102) は "labial spreading must be local… [Labial] has to be linked to two adjacent syllables in a morpheme domain in order to spread." と述べている。

上述した現象から分かるように、複数音節の動詞語幹につく完了接辞の母音が o として現れるのは、語幹の母音が全て o である場合に限られる。また、表 5 からもわかるように、複数音節の語では、母音 o の前には o 以外の母音が来ることはない（すなわち、i…o, u…o, e…o, a…o, ʊ…o はない）。したがって、複数音節の動詞語幹につく完了接辞の母音が o として現れるのは、語幹の最後の母音が o である場合のみといえよう。これに関しては、後述する単音節語幹の場合の例も裏付けになる。

語幹の o が完了接辞に与える円唇性の同化の範囲は、隣接する音節のみにあるため、完了接辞の母音 a, o を特定する要素は、隣接音節のようである。

したがって、a と o は母音調和の異なる group に属するものというより、同じ group にある 2 つの下位的変種だと考えられる。これに基づいて、a と o をまとめて A と設定できる。例えば、sonjo-χA は複数音節語幹の最後の音節の母音が o であるため、sonjo-χo となり、donji-χA は複数音節語幹の最後の音節の母音が o ではないため、donji-χa となる。

(ii) 単音節語幹の場合

次表のように、o で終わる単音節語幹の場合、完了接辞の母音が a であるものと、o であるものが共にある（次表の形式は福田 2008 と胡増益 1994 を基にしている）。単音節語幹の

[10] ここの名詞派生接辞は名詞・動詞語基に付与されて名詞を形成する派生接辞という意味である。

場合、語幹が o で終わっているにもかわらず、接辞の母音が a である場合があり得るのはなぜか、という問題がある。

表 6：o で終わる単音節動詞語幹の完了接辞

		-χa	-χo	-ŋqo
bo-	「錐で穴を開ける」			bo-ŋqo
do-	「（虫や鳥が）止る」	do-χa		
fo-	「寒さで肌が荒れる」	fo-χa		
ɢo-	「約束を取り消す」	ɢo-χa		
jo-	「言及する」			jo-ŋqo
o-	「なる；従う；…」	o-χa「従った」	o-χo「なった」	
so-	「撒く」	so-χa		
šo-	「削り取る」	šo-χa		
yo-	「（共に）行く」	yo-χa		

この問題に関しては、Kiyose (1998: 127; 2000: 188) は、古典語の綴りには o と ou の混乱があり、無圏点満文の創立者 Erdeni の記録と乾隆帝の訂正版を比較したところ、toume/tome, ayo/ayou, yoni/youni, dosi/dousi, sou-/so-, tou-/to- などの綴りの違いがある（スラッシュの左が Erdeni の記録で、右が乾隆帝の訂正版）と述べている。Kiyose によれば、so- は Erdeni が sou- のように綴っている。したがって、so- につく完了接辞の母音が o ではなく a であるのは、so- は古典語創立時点では sou- のよう発音をしたからであると考えられる（cf. tou-「罵る」, dou-「渡る」の完了接辞の母音は a である）。上表にある do-χa などの場合も同じ理由による可能性がある。すなわち、動詞語幹最後の母音が o ではない限り、後続する完了接辞の母音は o にはならないのである。

[4] 2 つの group

上述したように、a と o を同じ group にある下位的変種と考え、まとめて A と設定できる。したがって、(11) に挙げた、unspecified な母音をもつ接辞は次のような形式と考えられる。

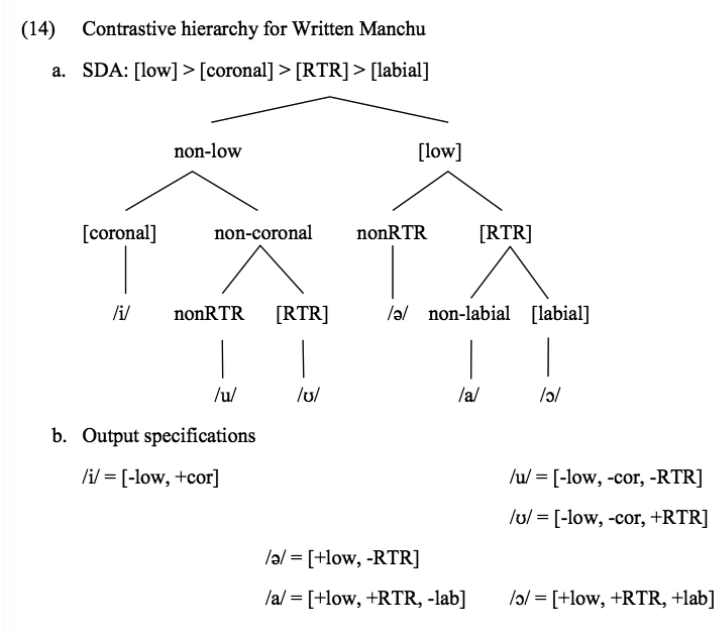
(13a) 完了接辞 -χA / -xe

(13b) 名詞接辞 -qʊ / -ku

上記の (13b) に関しては、前にも言及したように、Zhang Xi (1996: 48-50) が語基に group 1 の母音があれば、接辞の母音は ʊ であるが、語幹に group 2 の母音があれば、接辞の母音は u であると指摘している。すなわち、接辞の ʊ と語幹の group 1 の母音と対応し、接辞の u と語幹の group 2 の母音と対応するようである。ʊ は group 1 に属しているため、接辞の ʊ と group 1 の母音との対応はいうまでもない。一方、表 5 から分かるように、u は group 1 の母音とも、group 2 の母音とも共起可能である。

(14a) group 1: A, ʊ
(14b) group 2: e

Ko (2012: 256) は、古典語の母音の対立の序列を次のように表している。



注：SDA: successive division algorithm. RTR: retracted tongue root.

図 1：Contrastive hierarchy for Written Manchu（Ko 2012: 256）

上記の対立の序列を音素表記と表の形式にしたがって、次のように再整理した。

表 7：古典語の母音の対立の序列（Ko 2012: 256 に基づく再整理）

[low] >	[coronal] >	[RTR] >	[labial]		
non-low	[coronal]			/i/	[-low, +cor]
	non-coronal	nonRTR		/u/	[-low, -cor, -RTR]
		[RTR]		/ʊ/	[-low, -cor, +RTR]
[low]		nonRTR		/e/	[+low, -RTR]
		[RTR]	non-labial	/a/	[+low, +RTR, -lab]
			[labial]	/o/	[+low, +RTR, +lab]

上表からも分かるように、A と e、ʊ と u の対立の素性は共に [±RTR] である。それに対して、A の内部における a と o の円唇性の対立はその下位にある対立である。すなわち、古典語の A, ʊ と e, (u) のグルーピングは、[±RTR] のグルーピングと考えられる。

3.1.2. pre-古典語のグルーピング

[1] group 1 と共起可能な u について

前述したように、古典語の母音のグルーピングは、次のようである。

(15a) group 1:　　[+RTR]　A, ʊ

(15b) group 2:　　[-RTR]　e

このグルーピングには、次のような問題点がある。表 5 から分かるように、u は group 1 の母音と共起することも、group 2 の母音と共起することも可能である。例えば、次のような例がある。

(16a) u と group 1 と共起する例：yabu-「行く；歩く」

(16b) u と group 2 と共起する例：tetun「器」

u はなぜ group 1 の母音と共起可能か、という問題がある。これに関しては、Zhang Xi (1996: 43) は、ʊ は普通口蓋垂音の後に現れるが、u は口蓋垂音の後に現れることはない、という現象を踏まえて、次のように主張している。下線は筆者による。下線にある back consonants は口蓋垂音を指すと考えられる。

> Words in [minimal pairs of <u> and <ʊ> after non-back consonants] provide some indication that <u> and <ʊ> were at one time in the history of Manchu fully contrastive. By the time of the invention of the Manchu writing system, <u>the two vowels had largely merged into <u> phonetically in environments other than after back consonants</u>, where they were still phonemically and phonetically distinctive. (Zhang Xi 1996: 43)

Zhang Xi (1996: 43) の主張によれば、口蓋垂音の後以外の環境における ʊ と u は、u に統一された。すなわち、口蓋垂音の後以外の環境における ʊ はほとんど u に変化した。

これに関しては、Kiyose (2000: 183) も類似する主張をしている。Kiyose (2000) によれば、金国（1115 年-1234 年）の女真語に u と ü（それぞれ、本稿の表記の ʊ と u に対応すると考えられる）の対立があったが、古典語ではこの対立が口蓋垂子音の後のみにある。

> [Manchu] still kept vowel harmony for the opposition of /u/ (û) versus /ü/ (u) when following directly a velar consonant[11] (e.g. the deverbal nominalizer -kûn/-kun)… (Kiyose 2000: 183)

Zhang Xi と Kiyose の上記の主張から、次の 2 点が分かる。

(i) pre-古典語では、*ʊ と *u はそれぞれ group 1 と group 2 に属する。

*ʊ は group 1 の母音のみと共起する。

---

[11] Kiyose (2000) は古典語の u の前の k と ʊ の前の k（本稿の表記では q）を共に軟口蓋音としている。また、Kiyose (1977: 58) は女真語の対応する音の調音点をそれぞれ pre-velar と post-velar としている。一方、Gorelova (2002: 61) などによれば、古典語の ʊ の前の k（本稿の表記では q）は口蓋垂音である。

*u は group 2 の母音のみと共起する。

(ii) 後に古典語の段階の前までに、口蓋垂音の後以外の環境における ʊ は、ほとんど u に合流した。その結果、次のようになる。

残った ʊ は、group 1 の母音と共起する。

*ʊ 由来の u は、group 1 の母音と共起する。

*u 由来の u は、group 2 の母音と共起する。

上記の 2 点の結果として、u は group 1 の母音と共起する例と、group 2 の母音と共起する例が共にある。

また、김주원 (1990) は、古典語の口蓋垂音の後以外の環境における u は、オロチ語の同源語では u と対応する場合と ʊ と対応する場合が共にあり、ナーナイ語の同源語では u と対応する場合と o と対応する場合が共にあるため、古典語の口蓋垂音の後を除く環境の u にも昔 *u と *ʊ という 2 つの可能性があったと述べている。

[2] e について

前述したように、古典語の a と o の対立は、A (= a/o) と e の対立と比べて下位的な対立である。この現象は、より早い段階で e が e_1 と e_2 のような 2 つの母音であり、それぞれ a と o と異なる group にあった可能性を示唆している。

Kiyose (2000) が挙げた金国の女真語の母音体系を見ると、女真語には e_1 と e_2 に相当する母音 e と ö の違いがある。

表 8：The Vowel System of Chin Jurchen (Kiyose 1998: 124; 2000: 180)[12]

Back	a	o	u	i
Front	e	ö	ü	

[12] Kiyose は女真語の母音のグルーピングの種類の関しては back と front を使っている。すなわち、母音の前後によるグルーピングである。しかし、女真語の母音調和は母音の前後の調和ではない可能性がある。次のような 4 点の理由がある。

理由 1：女真語の研究は『華夷訳語』と碑文に基づいている。『華夷訳語』で記した女真文字は、表音用の漢字がついているため、発音が推測できる。しかし、碑文だけにある女真文字は発音の詳細が不明である。Kiyose が再建した金国の女真語の母音体系は、対格標識 *-ba/-be、与格接辞 -do/*-dö、使役接辞 -bu/*-bü における unspecified な母音に基づいている。しかし、*-ba, *-dö, *-bü は、碑文だけにある（Kiyose 1997: 150: they appear only in inscriptions, not listed in the *Hua-i i-yü*）ため、発音の詳細が不明である。*-dö/*-bü は、それぞれ -do/-bu と異なる女真文字を使っているから異なる音であると考えられるが、ö/ü は発音の詳細が不明であるため、前舌母音とは限らない。

理由 2：Kiyose (2000: 183) は古典語の ʊ と u の対立は、それぞれ女真語の u と ü の対立の名残と言及している。古典語の u は前舌母音ではないため、対応する女真語の ü は前舌母音とは考え難い。

理由 3：満洲古典語の e は、前舌母音ではないはずである（Coblin 2005）。三家子方言・黒河方言・シベ方言の e の代表的な異音も前舌母音ではない。したがって、相当積極的な理由がない限り、女真語の e を前舌母音と見なすのに無理があると考えられる。

理由 4：満洲古典語とツングース諸語の母音調和のグルーピングは [±RTR] のグルーピングが多い。ツングース諸語の場合は、例えば、エヴェンキ語（Bulatova & Grenoble 1999）やエウェン語（Malchukov 1995）などはそうである。

清瀬（1973: 21）と Kiyose (2000: 180-181) によると、金国の女真語の与格標識にある母音には、2 種類の形式があり、先行する名詞にある母音の性質によって特定される。例えば、次のような例がある。

(17a) ǰuɣu-do「道-与格」

(17b) te-dö「今-与格」

また、Kiyose (2000: 181) によると、女真語の ö は、後に e または u に変化した。これに基づいて、a と対立する e_1 を *e に設定し、o に対立する e_2 を *o に設定する（それに対し、o の元々の形式を *ɔ と設定する）。

[3] i はどの group に属するか

表 5 から分かるように、古典語の母音 i は、group 1 の母音と共起することも、group 2 の母音と共起することも可能である。例えば、季永海ほか（1986: 87）は次のような例を挙げている。

(18a) i と group 1 と共起する例：ilan「3」

(18b) i と group 2 と共起する例：ice「新しい」

i はもともとどの group に属するか、という問題が生じる。この問題に関しては、김주원 (1989; 1990) や Zhang Xi (1996) などは、古典語の i は、比較的早い段階で *i と *ɪ という 2 つの母音であった、というふうに述べている。

前述したように Kiyose (2000) が挙げた金国の女真語の母音体系には i が 1 つのみである。したがって、*i と *ɪ という 2 つの母音の違いがある時代は、女真語よりも早い段階であると推測できる。

Zhang Xi (1996: 57) によれば、Li Bing (1993) は古典語の i はエウェン語などのツングース語の同源語では i と対応する場合と ɪ と対応する場合が共にあるため、古典語にも昔 *i と *ɪ という 2 つの母音があった証拠となると主張している。また、김주원 (1990) も、古典語とナーナイ語とエウェン語のこのような対応の例を見つけている。例えば、次のような例がある。

(19)	満洲古典語	ナーナイ語	エウェン語（김주원 1990 からの引用）	
(a)	ili-χa	ɪlɪ-	ɪl-	「立つ」
(b)	isi-qa	ɪsɪ-	ɪs-	「近づく」
(c)	siri-χa	sɪrɪ-	hɪr-	「絞る」
(d)	ji-xe	dʒi-		「来る」
(e)	bi-xe	bi-	bi-	「いる」

*ɪ と *i を含めた全体像は次のようになる。池上（2001: 424）が再建した Proto-Tungus 語の母音体系に類似するようである。

表 9：pre-古典語の母音体系の再建

		1 列	2 列	3 列	4 列
group 1	[+RTR]	*a	*ɔ	*ʊ	*ɪ
group 2	[-RTR]	*e	*o	*u	*i

3.1.3. 現代方言におけるグルーピングの崩れと metaphony の発展

[1] [±RTR] のグルーピングの崩れ

古典語の段階で既に崩れかけている [±RTR] のグルーピングは、現代の方言までにさらに崩れてきた。

(i) 1 列と 2 列の崩れ

母音の変化により、現代の三家子方言と黒河方言とシベ方言のいずれにおいても、語幹における a と e の共起が可能になった[13]。例えば、次のような例がある。

(20a) 古典語　　ara-「作る」
(20b) 三家子方言　　ale-
(20c) 黒河方言　　ale-
(20d) シベ方言　　are-

(ii) 3 列目の group の崩れ

現代の三家子方言と黒河方言とシベ方言のいずれにおいても、[ʊ] と [u] は同じ音素の異音である。また、早田輝洋（2003）は古典語の段階で [ʊ] と [u] はすでに同じ音素であったと指摘している。

(iii) 4 列目の group の崩れ

古典語までに、すでに *ɪ と *i が合流して同じ音素 i になっていた。ただし、김주원 (1990) が指摘しているように、古典語における *ɪ 由来の i と *i 由来の i は、完了接辞が付与される場合、それぞれの group の性質を保つ場合がある。例えば、siri- における i は group 1 の *ɪ 由来の i であるため、完了接辞の母音が group 1 の a であるが、ji- における i は group 2 の *i 由来の i であるため、完了接辞の母音が group 2 の e である。

(21a) siri-χa「絞る-完了接辞」
(21b) ji-xe「来る-完了接辞」

しかし、現代方言の場合、異なる由来の i は、上記の違いを示さない。すなわち、この 3 つの方言では、*ɪ 由来の i と *i 由来の i は、完了接辞が付与される場合、完了接辞の母音が同様である。例えば、シベ方言の場合、次のようである。

---

[13] a と e が語根内で共起できるようになった例は、他の現象によるものもある。例えば、古典語の「唇子音＋u」はシベ方言では「唇子音＋e」に変化したため、語根内に a があるなら、a と e の共起がもたらされる（脚注 4 を参照されたい）。

(22a) sire-xe=yi「絞る-完了接辞=モダリティ接語」
(22b) ji-xe=yi「来る-完了接辞=モダリティ接語」

[2] 円唇性の metaphony のような現象

[±RTR] の母音調和のグルーピングの崩れと共に、三家子方言とシベ方言では、円唇性の metaphony のような現象が発展するようになった。共時的考察で述べたように、三家子方言とシベ方言では、語幹の最後の母音の円唇性と完了接辞の母音の円唇性には、次表のような関係がある。

表 10：語幹最後の母音と完了接辞の母音の円唇性の関係（三家子方言とシベ方言の場合）

語幹最後の母音の円唇性	完了接辞の母音の円唇性	
	三家子方言	シベ方言
円唇	円唇（稀に例外有り）	円唇
非円唇	非円唇	非円唇と円唇が共に可能

上表からわかるように、完了接辞の母音は語幹の最後の母音から円唇性の同化を受ける。また、前述したように、このような円唇性の同化の範囲は隣接した音節にとどまる。例えば、2 音節語幹で 1 音節目の母音と 2 音節目の母音の円唇性が異なる場合、完了接辞の母音の円唇性は、隣接した音節の円唇性と一致する。(4), (5), (9) のような例がある。したがって、このような同化は、典型的な母音調和とはかなり異なる現象であり、metaphony のような現象であると考えられる。

女真語にはこのような円唇性の metaphony は見られない（Kiyose 1997: 149）。

古典語では、3.1[3] で述べたように、語幹最後の母音が o である場合、接辞の母音も o になるが、それ以外の場合、接辞の母音は o になることはない。この現象は円唇性の metaphony のような現象に見えるが、しかし、語幹最後の母音が o 以外の円唇母音（すなわち u）である場合、完了接辞の母音は非円唇母音であり、語幹最後の母音から円唇性の影響を受けていない。例えば、sab**u-χa**「見える-完了接辞」、eb**u-xe**「着る-完了接辞」、b**u-xe**「与える-完了接辞」、gasχ**u-χa**「誓う-完了接辞」などのような例がある。

それに対し、現代の三家子方言とシベ方言では、完了接辞の母音の円唇性は、語幹末の母音の円唇性から体系的に影響を受けているため、円唇性の metaphony のような現象といえよう。この円唇性の metaphony は、円唇性の順行同化によると考えられる。例えば、三家子方言では、bu-「与える」に完了接辞が後続する場合、完了接辞は -xu であり、完了接辞における母音 u は円唇母音である。また、シベ方言では、bu-「与える」に完了接辞が後続する場合、完了接辞は -xe と -xu の間で揺れ、完了接辞における母音は非円唇母音 e と円唇母音 u のどちらも可能である。すなわち、語幹 bu- にある円唇母音が接辞にある母音を円唇母音に同化させているのである。

3.1.4. まとめ

上記の内容をまとめると、図 2 と図 3 のようになる。

次の図 2 は満洲語における [±RTR] の母音調和のグルーピングの崩壊を示す。

最も早い段階

		1 列	2 列	3 列	4 列
group 1	[+RTR]	*a	*ɔ	*ʊ	*ɪ
group 2	[-RTR]	*e	*o	*u	*i

最も早い段階に溯るとこのような形式。Proto-Tungus に相当すると考えられる。

↓

古典語の前

		1 列	2 列	3 列	4 列
group 1	[+RTR]	*a	*ɔ	*ʊ	i
group 2	[-RTR]	*e	*o	*u	

[1] *ɪ と *i の対立の消失により、4 列は中立母音へ。
この段階は、女真語に類似する。

↓

古典語の時点

		1 列	2 列	3 列	4 列
group 1	[+RTR]	a	ɔ	ʊ	i
group 2	[-RTR]	e		u	

[2] *e と *o の対立の消失に伴い、1 列と 2 列の [+RTR] は下位的対立へ。
[3] 口蓋垂音の後以外の環境の ʊ が u に変化したので、u が [+RTR] とも [-RTR] とも共起可能。

↓

現代方言

	1 列	2 列	3 列	4 列
group 1	a	ɔ	u	i
group 2	e			

[4] 一部の a が e に変化したため、a と e が共起可能になる。
[5] ʊ と u の対立の消失により、3 列の対立が崩れる。

図 2：[±RTR] の母音調和のグルーピングの崩壊

次の図 3 は満洲語における円唇性の metaphony のような現象の発展を示す。

【古典語より早い段階】

体系的な円唇性の metaphony が存在しなかった可能性が高い。

（Kiyose 1997: 149 によれば、女真語には見られない）

↓

【古典語】

語幹最後の母音が o である場合にのみ、完了接辞の母音が円唇母音である。

語幹最後の母音	完了接辞の母音
円唇母音 o	円唇（o）
円唇母音 u	非円唇（a/e）
非円唇母音	非円唇（a/e）

↓

【現代方言】

三家子方言とシベ方言には、体系的な円唇性の metaphony のような現象がある。

三家子方言

語幹最後の母音	完了接辞の母音
円唇（o / u）	円唇（u） 稀に u ~ e
非円唇（a / e / i）	非円唇（e）

シベ方言

語幹の母音	完了接辞の母音
円唇（o / u）	円唇（u）と非円唇（e）の間で揺れる
非円唇（a / e / i）	非円唇（e）

図 3：円唇性の metaphony のような現象の発展

前述した内容から次の 2 点が分かる。

(i) pre-古典語には [±RTR] の母音調和があったが、現代の三家子方言・黒河方言・シベ方言では、[±RTR] の母音調和がほとんど崩れている。古典語は、崩れる途中の時点にあったと考えられる。

(ii) pre-古典語には、体系的な円唇性の metaphony がなかった可能性が高いが、現代方言の三家子方言とシベ方言には体系的な円唇性の metaphony のような現象が出現している。

3.2. 接辞の母音におけるグルーピングの有無の変化

前節では主に完了接辞の母音について考察した。しかし、古典語では、unspecified な母音を含む接辞は、完了接辞だけではない。そこで本節では、古典語と現代方言における完了接辞以外の接辞の母音について考察する。

[1] 移動接辞

古典語の移動接辞 -na/-no/-ne には unspecified な母音がある（Gorelova 2002: 239）。完了接辞の母音と同じパターンである。一方、三家子方言と黒河方言の移動接辞は共に -na であ

り、unspecified な母音はない。なお、シベ方言には移動接辞がない。

(23a) 三家子方言　　ta-na-「見にいく」（< ta-「見る」+ -na「移動接辞」）
(23b) 黒河方言　　twa-na-「見にいく」（< twa-「見る」+ -na「移動接辞」）
(23a) 三家子方言　　tuŋ-na-「落ちる」（< tuxu-「落ちる；転ぶ」+ -na「移動接辞」）
(23b) 黒河方言　　tuŋ-na-「落ちる」（< tuxu-「落ちる；転ぶ」+ -na「移動接辞」）

[2] 複数接辞

古典語の複数接辞 -sa/-so/-se にも unspecified な母音がある（Gorelova 2002: 134）。完了接辞の母音と同じパターンである。一方、三家子方言と黒河方言の複数接辞は共に -sa であり、シベ方言の複数接辞は -se である。どれにも unspecified な母音はない。

(24a) 三家子方言　　cuwa-sa「兵士たち」（< cuwa「兵士」+ -sa「複数接辞」）
(24b) 黒河方言　　cuxa-sa「兵士たち」（< cuxa「兵士」+ -sa「複数接辞」）
(24c) シベ方言　　cwaχe-se「兵士たち」（< cwaχe「兵士」+ -se「複数接辞」）
(25a) 三家子方言　　xexe-sa「妻たち」（< xexe「妻」+ -sa「複数接辞」）
(25b) 黒河方言　　xexe-sa「妻たち」（< xexe「妻」+ -sa「複数接辞」）
(25c) シベ方言　　xexe-se「妻たち」（< xexe「妻」+ -se「複数接辞」）

[3] 未完了相連体接辞

(i) 古典語

古典語の未完了相連体接辞 -ra/-ro/-re にも unspecified な母音がある。しかし、未完了相連体接辞の母音を特定する要素と完了接辞の母音を特定する要素は同様ではない（これに関しては Hayata 1980 などにも指摘がある）。

未完了相連体接辞の母音は、直前の音節の母音（すなわち、語幹末の母音）だけによって決定されるようである。語幹末の母音が A である場合のみ、未完了接辞の母音が A である。語幹末の母音が A 以外の母音である場合、たとえ語幹に A があるとしても、未完了相連体接辞の母音が e である。例えば、Li (2010: 46) には次のような例がある。

(26a) taci-χa「習う-完了接辞」
(26b) taci-re「習う-未完了相連体接辞」

すなわち、未完了相連体接辞の母音を特定する要素は隣接する音節の母音である。したがって、この現象は母音調和より、metaphony に近いといえる。

(ii) 三家子方言と黒河方言とシベ方言

三家子方言と黒河方言における未完了相連体接辞は -le であり、シベ方言における未完了相連体接辞は -re である。どれにも unspecified な母音はない。

[4] 使役接辞

古典語の使役接辞 -bu には unspecified な母音はない。現代の三家子方言と黒河方言の使役接辞 -bu にも unspecified な母音はない。しかし、現代のシベ方言の使役接辞 -we～-wu の

母音は unspecified なようである。-we ~ -wu の母音は、非円唇母音 e と円唇母音 u の間で揺れる。多くの話者の発音では、この接辞の母音の円唇性を決定する要素は、語基末の母音の円唇性のようである。すなわち、語基末の母音が円唇母音の場合、-we と -wu のどちらもありえるが、語基末の母音が非円唇母音の場合、-we のみが可能である。この点においては、シベ方言の完了接辞の母音の場合に類似する。おそらく現代のシベ方言の使役接辞の母音も同じように円唇性の metaphony を示している可能性がある。

なお、Kiyose (2000: 181-182) によると、金国の女真語の使役接辞 -bu/*-bü（本稿の表記では -bʊ/*-bu）には unspecified な母音があり、先行する動詞の母音によって使役接辞の母音が決定されるが、明国の女真語ではすでにこの母音の違いが失われ、-bu の場合のみが残ったようである。

[5] 対格接辞と与格接辞

古典語と三家子方言と黒河方言とシベ方言のいずれにおいても対格接語と与格接語の母音は specified である。一方、Kiyose (2000: 180-182) によると、金国の女真語の対格標識 *-ba/-be[14] と与格標識 -do/*-dö の母音は unspecified であり、先行する名詞の母音で特定されるが、明国の女真語では、すでにこの母音の違いが失われている。

前述した内容をまとめると、次表のようになる。

表 11：接辞の母音におけるグルーピングの有無の変化

金国の女真語	明国の女真語	古典語	現代方言			
			三家子方言	黒河方言	シベ方言	
		-χA/-xe	-xe/-xu	-xe (-xa)	-xe/-xu/ -χe/-χu	完了接辞
		-nA/-ne	-na	-na	接辞無し	移動接辞
		-sA/-se	-sa	-sa	-se	複数接辞
		-ra/-ro/-re	-le	-le	-re	未完了相連体接辞
-bu/*-bü	-bu	-bu	-bu	-bu	-we/-wu	使役接辞
*-ba/-be	-be	=be	=be	=be	=we	対格標識
-do/*-dö	-do	=de	=de	=de	=de	与格標識

注 1：　接辞の母音が specified な場合または接辞がない場合に濃い網掛け、
　　接辞の母音が unspecified だが、metaphony の場合に薄い網掛けをした。
注 2：　A = a ~ o。
注 3：　完了接辞の子音は摩擦音以外に破裂音もあり得るが、スペースの関係で省略した。
注 4：　古典語と現代方言の格標識は接語と思われるが、対照のため表に含めた。

[14] 早田輝洋（2008）と久保ほか（2011）は、古典語とシベ語の格標識を接語として見なしており、また、Kiyose (2000) は女真語の対格標識・与格標識を接辞と見なしている。早田輝洋（2005: 130）によれば、「格標識が接辞なのか単語なのかは，表記と母音調和によく表れている」。Kiyose (2000) によれば、金国の女真語の対格標識・与格標識には母音調和が現れるため、Kiyose (2000) が女真語の対格標識・与格標識を接辞と呼んでいるのはこれに関係する可能性がある。

上表から次のようなことが分かる。

(i) 母音調和の [±RTR] のグルーピングのある接辞の数が減る傾向にある。

(ii) 円唇性の metaphony の接辞が増える傾向にある。

4. おわりに

共時的考察では、次のようなことを明らかにした。語根では異なる種類の母音のグルーピングが見出せない。また、三家子方言とシベ方言では語幹の同化で接辞における母音が交替する場合があるが、同化の範囲は隣接する音節に限るようであり、したがって、典型的な母音調和とはかなり異なる性格を示している。

通時的考察では、次のようなことを明らかにした。pre-古典語の [±RTR] の母音調和は現代の三家子方言・黒河方言・シベ方言ではほとんど崩れている。また、母音調和の接辞の数が減る傾向にある。一方、現代方言のうち、三家子方言とシベ方言では、体系的な円唇性の metaphony が出現している。

参考文献

Anderson, Stephen R. (1980) Problems and perspectives in the description of vowel harmony. In: Robert M. Vago (ed.), *Issues in Vowel Harmony*. 1-48. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Aoki, Haruo. (1968) Toward a typology of vowel harmony. *International Journal of American Linguistics*. 34: 142-145.

Ard, Josh. (1984) Vowel harmony in Manchu: a critical overview. *Journal of Linguistics*. 20: 57-80.

Bulatova, Nadezhda & Lenore Grenoble. (1999) *Evenki (Languages of the World: Materials 141)*. München: Lincom Europa.

Coblin, Weldon South. (2005) A note on the pronunciation of the Manchu vowel *e*. *Journal of the American Oriental Society*. 125(3): 403.

福田昆之（2008）『増訂満洲語文語辞典』横浜：FLL.

Gorelova, Liliya M. (2002) *Manchu Grammar*. Leiden: Brill.

早田清冷（2015）「古典満洲語属格標識 -i の研究」博士論文，東京大学人文社会系研究科.

Hayata, Teruhiro. (1980) Non-abstract vowel harmony in Manchu. *Gengo Kenkyu*. 77: 59-79.

早田輝洋（2003）「満洲語の母音体系」『九州大学言語学論集』23: 1-10.

————（2005）「満洲語の指示代名詞と指示形容詞—『満文金瓶梅』を中心に—」『満族史研究』4: 114-140.

————（2008）「満洲語の格標識は附属語か接辞か」寺村政男・久保智之・福盛貴弘（編）『語学教育フォーラム』16: 1-9.

————（2010）「満洲語と満洲文字」寺村政男・福盛貴弘（編）『語学教育フォーラム』24: 1-35.

胡増益（1994）『新満漢大詞典』烏魯木斉：新疆人民出版社.

池上二良（2001）「ツングース語の変遷」『ツングース語研究』397-445. 東京：汲古書院.

季永海・劉憲景・屈六生（1986）『満語語法』北京：民族出版社.

亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）（1996）『言語学大辞典第 6 巻』東京：三省堂.

김주원 (1989)『만주 퉁구스제어의 모음조화 연구』서울대학교 박사논문.

——— (1990)「만주어 모음체계의 변천에 대하여」『알타이학보』 2: 1-26.

清瀬義三郎則府（1973）「女真音再構成考」『言語研究』64: 12-43.

Kiyose, Gisaburo Norikura. (1977) *A Study of the Jurchen Language and Script: Reconstruction and Decipherment*. Kyoto: Horitsubunkasha.

———————————. (1997) The collapse of palatal-velar harmony from Jurchen to Manchu. *Historical and Linguistics Interaction between Inner-Asia and Europe*. *Studia Uralo-Altaica*. 39: 147-150.

———————————. (1998) Dialectal lineage from Jurchen to Manchu. *Central Asiatic Journal*. 42: 123-127.

———————————. (2000) Genealogical relationship of Jurchen dialects and literary Manchu. *Central Asiatic Journal*. 44: 177-189.

Ko, Seongyeon. (2012) *Tongue Root Harmony and Vowel Contrast in Northeast Asian Languages*. PhD dissertation. Cornell University.

児倉徳和（2018）『シベ語のモダリティの研究』東京：勉誠出版.

Krämer, Martin. (2003) *Vowel Harmony and Correspondence Theory*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

久保智之（1993）「シベ語（満洲語口語）音韻論のための覚え書き—語末に [ɔ] が出現するいくつかの場合—」『言語文化接触に関する研究』5: 25-43.

Kubo, Tomoyuki. (2008) A sketch of Sibe phonology. *Gogaku Kenkyuu Fooramu*. 16: 127-142.

久保智之・児倉徳和・庄声（2011）『2011 年度言語研修シベ語テキスト 1 シベ語の基礎』東京外国語大学アジア・ アフリカ言語文化研究所.

Li Bing. (1993) *A Re-analysis of the Vowel System of Classical Manchu*. ms. Universiteit van Amsterdam.

Li, Gertraude Roth. (2010) *Manchu: A Textbook for Reading Documents* (2nd edition). Honolulu: University of Hawai'i Press.

Malchukov, Andrej L. (1995) *Even (Languages of the World: Materials 12)*. München: Lincom Europa.

Möllendorff, P. G. von. (1892) *A Manchu Grammar with Analysed Texts*. Shanghai: American Presbyterian Mission Press.

田村実造・今西春秋・佐藤長（1966-1968）『五体清文鑑訳解』京都 ： 京都大学文学部内陸アジア研究所.

王海波（2011）「満洲語三家子方言における母音調和の存在に関する考察」『北方言語研究』1: 79-99.

王海波（2018）「満洲・シベ語現代方言音韻論」博士論文，東京大学人文社会系研究科.

Zhang Xi. (1996) *Vowel Systems of the Manchu-Tungus Languages of China*. Doctoral dissertation. University of Toronto.

Vowel Harmony in the Modern Dialects of Manchu

Haibo WANG

Keywords: Manchu, Sanjiazi dialect, Heihe dialect, Sibe dialect, vowel harmony

Synchronically, the vowel harmony in the Sanjiazi and Sibe dialects of Manchu is far from a typical one. It is impossible to group the vowels in the root into any classes, and the scope of the assimilation only includes the suffix and the syllable immediately before the suffix, which does not meet the requirement of vowel harmony that the scope of vowel harmony is a morphological unit which is unbounded to a specific number of syllables. Diachronically, however, Manchu is presumed to have showed the vowel harmony of [±RTR] originally, but the groups collapsed gradually, and there has been a gradual decrease in the number of the suffixes showing the unspecified vowels. On the other hand, the metaphony of [±round] has developed into a regular phenomenon in the Sanjiazi and Sibe dialects.

（おう・かいは　haibohaipo@163.com）